

自死問題を考える

本願寺フォーラム

自殺1人で最低5人に影響

必要な社会的取り組み

国内の自殺者数が10年連続で3万人を超え深刻な社会問題となっている中、自殺(自死)問題への取り組みを考える「本願寺フォーラム・自死とわたしたち～みんなで考える～」(主催・浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター)が7日午後、京都市下京区の開法会館で開かれた。専門家が自殺問題の現状と課題を講演し、遺族が遺された者の気持ちを語り、自殺対策活動を実施する僧侶らが取り組みを報告するなど、この問題への対応を考えた。



「本願寺フォーラム・自死とわたしたち」のパネル討論

フォーラムでは最初に自殺問題に取り組み清水新二・奈良女子大学教授(精神保健学)が基調講演。自殺者増加に戦後3回のピークがあることを示し、個人の「弱さ」に原因が求められるがちな自死について「個人の心の問題で考えるのは無理。時代の変化が自死に濃い影を投げかけている」と主張。男性で3人に1人、女性で4人に1人が身近な人の自死を経験していることや自殺未遂者が推定30万人いること、一人の自殺で最低5人が影響を受けることを挙げ

「自殺は他人事ではない」とした。その上で「自死は単一の理由で発生するのではない。いくつかの問題が重なると始まりです。それほど遺された者にとっては大いなる社会的な取り組みが必要」とし、僧侶の「柔軟で思の長い取り組みを期待したい」とした。

5年前に母親が自殺した同志社大学の尾角光美さんは遺族の気持ちを吐露。うつ病だった母親が家を出ていくのを止めていたが、手を離れたため母親が家を出て自殺したことから「その手を私が離してなければ」と自責の念で苦しんだことを語り、「そのまま受け入れてくれた友達や知り合いに出会えたことは幸せでした」と、自死を受け入れてくれた周囲の存在が支えになった体験を話した。

この後、昨年東京で発足した「自殺対策に取組む僧侶の会」の藤澤克己代表(同派僧侶)が会の取り組みを報告。自殺を考えている人には手紙で悩みを受け付けメンバーの僧侶3人1組で文案を考え返信していることや、年に1回自死者追悼法要を営み遺族と茶話会を行っていることを紹介し「生きていくことができないほど辛く選択肢がそれしか見えなくなると自殺してしまう。自殺したい人に寄り添い一緒に考え行動することが自殺対策になる」と話した。

フォーラムでは最初に自殺問題に取り組み清水新二・奈良女子大学教授(精神保健学)が基調講演。自殺者増加に戦後3回のピークがあることを示し、個人の「弱さ」に原因が求められるがちな自死について「個人の心の問題で考えるのは無理。時代の変化が自死に濃い影を投げかけている」と主張。男性で3人に1人、女性で4人に1人が身近な人の自死を経験していることや自殺未遂者が推定30万人いること、一人の自殺で最低5人が影響を受けることを挙げ

「自殺は他人事ではない」とした。その上で「自死は単一の理由で発生するのではない。いくつかの問題が重なると始まりです。それほど遺された者にとっては大いなる社会的な取り組みが必要」とし、僧侶の「柔軟で思の長い取り組みを期待したい」とした。

この後4人でパネル討論。実際に自坊で自殺の電話相談をやるには、自殺を考えている人の悩みを聞くこと自体辛いことであるため、あるいは24時間体制をとる必要などから、難しいとの意見があった。フォーラムには僧侶・市民ら約300人が参加した。

「教えに反する」73・8%

自死問題実態調査

フォーラムでは、教学伝道研究センターが本願寺派全寺院1万228カ寺を対象に5月に実施した「自死問題実態調査」の結果も発表された(回答数2682カ寺、全体の26%)。

調査は自死に関する僧侶の意識調査などを目的に実施。結果は同研究センターの日野慶之研究員が報告した。

それによると、「自死は個人の自由意志にもとづく選択として認められる」との設問に、「思わない」51・4%、「あまり思わない」13・4%、「6割以上を占め、思う」30・4%と回答された。

「自死は命を粗末にしてる」との問いに「思う」1651・9%と「やや思う」1651・6%で7割近くとなり、最初の問いと合わせて「自死は命を粗末にしてる」との問いに「思う」1651・9%と「やや思う」1651・6%で7割近くとなり、最初の問いと合わせて

「自死は命を粗末にしてる」との問いに「思う」1651・9%と「やや思う」1651・6%で7割近くとなり、最初の問いと合わせて